

子どものころ、スパゲティといえどナポリタンかミートソースだった。私はケチャップよりも肉が食いたくて、ミートソースをせがんだ。大人になって、ナポリタンなんて代物はナポリにはないん

## 窓のそとは、森

### ③コンピューターが ねんどに勝つ日

慶應義塾大学大学院  
メディアデザイン研究科教授

中村 伊知哉



だと知った。肉スバは本場ではボロネーゼというんだと知った。本場はイタリア、ボロネーゼである  
と。  
ボロネーゼで、ボロネーゼを食  
った。子どものころのミートソー

スとはずいぶん違っていて、肉がゴロンゴロン入った、大人な感じだった。ふうん本物ってこういうものなのか、と思った。

ボロネーゼでは毎年、国際児童書展が開かれる。ここは絵本の本場でもあるのだ。世界中の絵本作家と出版社が、いろとりどりの、子どもへの愛情があふれる書物を持ち寄って、見せ合う。地上で最も美しい、本物の本が集まる。紙の文化は、いい。グーテンベルクが活版印刷を発明して五百六十年、今なお進化を続けている。  
一方、デジタルの時代だという。私は子どもがデジタル技術を使っ



てアニメや音楽などの作品を作る活動を進めている。デジタルえほんという会社も立ち上げ、新しい表現を開発している。スマホをタッチして読み進めるえほん。タブレットをなぞることで映像や音が現れるえほん。紙の絵本とは異なる楽しい文化が生まれつつある。

紙が欧州ならば、日本をデジタルの本場にしたい。ということ、国際デジタルえほんフェアという催しを開いてきた。三回めとなる前回は四十か国二百作品が集まった。早くもボロネーゼのデジタル部門を超える、世界最大のデジタルえほん展示に育っている。  
ところが。まだまだなんだな、

これが。  
デジタルでアニメを作ろう。ねんどをこねて、人形を作る。それを動かして、デジタルカメラで撮って、パソコンで編集して、アニメができる。という活動を子どもたちにさせるのだが、どうにも子どもたちはねんどに夢中になるのだ。  
そう、ねんどの手触り、質感、

おもしろさに、コンピューターは連戦連敗なのだ。デジタルなら世界の映像が見られて、ビックリする音も楽しめるのだが、それはそれで、でもまだねんどは強い。コンピューターがねんどに勝つ日は来るのだろうか。

いや、近ごろは、ママのスマホをいじっているせいで、紙の本を指で拡大しようとする幼児を見かけることもある。案外、その日も近いのだろうか。

きっと両者は、長い間、同居していくのだろう。紙もねんどもデジタルも、互いのよいところを見つけて合っ。手紙とメールも、そうなってくれるだろうか。

**プロフィール** 一九八四年郵政省入省。橋本行革で省庁再編に携わったのを最後に退官し渡米。一九九八年MITメディアラボ客員教授。二〇〇二年スタンフォード日本センター研究所長。二〇〇六年より慶應義塾大学教授。社団法人融合研究所所長などを兼務。著書に『コンテンツと国家戦略』（角川Panorama選書）など多数。